

富士宮市文化財調査報告書 第10集

富士宮市古墳実測調査報告書

大室古墳
—別所稻荷塚古墳—
虚空蔵社古墳

1987

静岡県富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書 第10集

富士宮市古墳実測調査報告書

大室古墳
—別所稻荷塚古墳—
虚空蔵社古墳

1987

静岡県富士宮市教育委員会

例 言

1. 本書は静岡県富士宮市に所在する大室古墳、別所稲荷塚古墳、虚空蔵社古墳の墳丘実測調査報告書である。

大室古墳—おおむろ—富士宮市小泉字大室1467—1

別所稲荷塚古墳—べっしょいなりづか—富士宮市安居山字別所857—1

虚空蔵社古墳—こくぞうしゃ—富士宮市小泉字石敷765

2. 調査は大室古墳を同墳丘実測調査団が昭和53年8月1日～8日、別所稲荷塚古墳・虚空蔵社古墳を富士宮市教育委員会が昭和61年3月4日～13日・9月29日～10月8日にそれぞれ実施したものである。

大室古墳墳丘実測調査団

団長 若林 淳之（静岡大学教授）

富士宮市教育委員会

教育長 塩川 隆司

技師 馬飼野行雄・渡井 一信

作業員 望月 秀雄

なお調査の指導を楠松章八（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究一課長）、野村昭光（富士宮市文化財保護審議委員）両氏に願った。

3. 本書の執筆、編集は馬飼野があたり、印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。
4. 調査に関する資料は富士宮市教育委員会が保管している。

目 次

1. はじめに	1
2. 富士宮の古墳	2
3. 調査の概要	7
a. 大室古墳	
b. 別所稲荷塚古墳	
c. 虚空蔵社古墳	
4. まとめ	8

1. はじめに

富士宮市は縄文時代や古墳時代の遺跡に比べて、死者の埋葬のためにつくられた高塚、いわゆる古墳の造営が極単に少ない。前述の古墳時代遺跡も初頭時に集中しているから、それも因果関係はもたないようで、古墳造営に至るまでの生産力がこの地域に少なかったと理解するのが妥当のようである。具体的には隣接の富士市が518基（富士市遺跡地名表 昭和60年）であるのに対して、富士宮市は21箇所（富士宮市古墳確認調査報告 昭和54年）で5%にも満たないでいる。

このことはすでに本地域の何れよりも富士市浮島ヶ原一帯の低湿地が稲作を行う上で充分な適地であって、4世紀末にはついに珠流河国（スルガのクニ）の首長墓までも造営したことがいわれて、これには増川の浅間古墳や比奈の東坂古墳があてられている。前者が前方後方墳（約100m）、後者が前方後円墳（約60m）で、一見して首長墓と知れる大型古墳である。それを初源に以後、富士市では境の薬師塚古墳、伝法の伊勢塚古墳など賑々と造営される。しかし、こうした大型古墳もわずかに7基を数えるまでで、大半は6世紀中葉以降に発生した群集墳なる、10m前後の小古墳によって形成される。それは浮島ヶ原湿原を望む鋸刃状の丘陵上に数基から数十基、場合によっては百基以上が群を成し、さらに西方に向って鷹岡、岩松地域にも発展をみる。

おそらくこの期の波及によって富士宮市にも古墳の出現をみたようで、それはいわゆる珠流河国の外縁にあっても、地域首長層の弱体化に伴って、中小首長層の台頭がここまで及んだことを示していよう。つまり珠流河国にあっては、何の変哲もない極く一般的な古墳、あるいは古墳群の在り方ではあるが、大和政権の地方支配の進展の一端を垣間見れることはそれなりに貴重な歴史資料というべきで、また希少であるが故に万全な保護、保存がなされるべきであった。

しかし、何れもそうであったようにとくに列島改造論に端を発した昭和40年代の怒濤の開発は、一夜にして古墳が宅地に、あるいは道路にと日常茶飯事であって、数多くの古墳や遺跡が破壊、消滅していったのは記憶に新しい。その後、低迷期を迎えたものの、除々に浸透する開発の波は市街地周辺に激むことなく拡大されて、ついには大室古墳や虚空蔵社古墳まで及ぼした。が、その都度、植松章八氏（静岡県埋蔵文化財調査研究所）や野村昭光氏（静岡県文化財保護指導員）らの機転によって辛うじて保護されてきた次第であった。

これに危機感を抱いた富士宮市教育委員会は先ず、昭和53年8月に大室古墳墳丘実測調査を実施して、文化財保護、保存の啓蒙を計り、昭和60年3月11日に市では最初の指定史跡を拝するまでになった。次いで翌54年度には市内一円古墳確認調査を実施して、その現状把握と保護、監視に努めて今日に至っている。今回の報告は比較的保存状況に優れた別所稲荷塚古墳、虚空蔵社古墳の墳丘実測調査を追加して、今後の保護、保存の礎にしようとするものである。

2. 富士宮の古墳

昭和54年度に市教育委員会が野村昭光県文化財保護指導員の指導を得て実施した、富士宮市古墳確認調査報告では、21箇所が認められたが、1基が誤認で、昭和62年3月31日現在、20箇所となっている(図-1)。

富士宮の古墳の発見は大正末期～昭和初期に活躍された、本地域の考古学研究的創始でもある岳南考古学会に負うところがおおきく、当時のメンバーであった故佐野要吉氏が昭和6年に刊行した「富士南麓郷土史談」によれば、以下が確認されたという。

- ① 安居山別所古墳 円墳群集
 - ② 黒田小学校校庭上 円墳(月の輪古墳) - 現月の輪法印塚古墳-
 - ③ 富丘中里古墳 円墳
 - ④ 小泉若宮及び古宮古墳 円墳群集(10数基)
 - ⑤ 村山元村山古墳
 - ⑥ 小泉三室古墳 円墳 - 現大室古墳-
 - ⑦ 小泉神祖古墳 - 現神祖3号墳-
- これに戦後、中野国雄日本考古学協会員や植松、野村両氏によって発見された、
- ⑧ 北高校上の宮原古墳 - 現行人塚古墳-
 - ⑨ 南部谷戸古墳群(黒田)
 - ⑩ 塚本古墳(黒田)

が理解されて至っていたのである。それを補充して成ったのが富士宮市古墳確認調査報告で、上述古墳についても詳細な所見がなされており、それらを要約しながら紹介してみよう。

K-1 元村山古墳 村山字元村山 地点不明

静岡県史第2巻に地点不明、五鈴鏡出土と記載される。県史編さん時に村山浅間神社宝物殿で五鈴鏡を実見した佐野要吉氏によると、当神社所蔵であるが故に、その付近を想定したらしい。当時より不明な部分が多く、なお戦後、紛失したまま現在はまったく不明という。神成松葉遺跡内に所在する薬師堂より奉納された、または県西部よりの搬入品であろう。など諸説相見なが、いずれも曖昧である。

ここで考古学的見地からすれば、① 五鈴鏡を出土すべき古墳は大規模な前・中期古墳に多く、当地域では確認例がない。② 古墳は本来集落のうえに成り立つものであり、近隣遺跡まで2km以上の隔たりは古墳成立の可能性を極めて薄くさす。③ さらに周辺の地形条件も古墳の成立に不向きである。というようにその存在は疑問が多い。

K-2 大室古墳 小泉字大室1467-1 現存 昭和60年3月11日 市指定史跡

本墳は戦前より存在が知れて、静岡県史第2巻に小泉三室山神社古墳として登場する。しかし、以後、富士宮市史に小泉三ツ室古墳、地方誌に小泉山の神古墳等、各研究者によってまちまちに呼称されて至り、昭和53年の墳丘実測調査報告で「大室古墳」と統一呼称している。あ

わせて神祖1-3号墳とともに「三ツ室古墳群」を設定している。

前述するように本墳は、良好な形状を維持して至ったが、周辺に宅地化が及んで10数年前とは大きな変貌をとげつつあり、その危機感が今調査の端緒となった訳である。それによれば基底径15m、巾2mの周濠を有した円墳で、高さは3m弱が予想されている。

K-3 神祖1号墳 小泉字神祖上1613 現存

基底径7-8m、高さ1.5m程の円墳が予想される。東西裾部を削平されるも保存状況は良好。三室古墳群のひとつで墳頂に山の神を祀る。須恵器片が出土している。

K-4 神祖2号墳 小泉字神祖1320-1 基底部残存

宅地際に上部を削平されらしい1m弱の偏平礫が数個確認される。直刀、鉄鏃、須恵器の出土をみたというが不明である。周辺に同様の遺物の出土地点もあったらしく、有力な古墳群、いわゆる三室古墳群を形成していたことが窺える。

K-5 若宮古墳群 小泉字古宮2346-2他 消滅

前述佐野氏の報文のほかに、静岡県史第1巻では、「字若宮及び古宮の南向きの丘上には数基の小円墳が存在する。大宮町の東に接する富士根村小字小泉には古墳が群集している所がある。即ち若宮及び古宮のほとりて、丘上には円墳の完全なものが数基見え、付近からは須恵器の破片が多く出る。」とある。

現在ではその痕跡はまったくないが、戦後、辛うじて本古墳群の残存を確認したのは野村氏である。しかし、それも宅造途中であったため、わずかに石室側壁を2段確認しただけで、詳細は知れずじまいであった。

本古墳群は上述より優勢な古墳群を形成していたことは確かで、文化財行政の浸透のない時期に破壊されてしまったことは本地域の古墳時代考察に大きな痛手となっている。

K-6 月の輪法印塚古墳 星山字月の輪1030-2 消滅

これも佐野氏の報文の他、静岡県史第1巻に、「黒田区は市街の南1.25kmを隔て調井川の右岸にある。其の小学校地内に小円墳が2基存すれども、未発掘らしい。」とある。以後、それも実施されることなく校庭造成工事によって破壊消滅している。

本墳は月の輪上遺跡内に位置し、前面には南部谷戸、五反田遺跡と古墳時代集落跡と推測される遺跡群が密集するから、その存在に異和はなく、過去の文献にしたがひ、小円墳2基の存在は認めてもよからう。

K-7 塚本古墳 黒田字九塚380 現存

宅地内に墳丘裾部を削除され、積石によって保たれている。現状では径5-6m、高さ1.5-2m程で、積石は葺石を積んだであろう。遺物は確認されないが、南部谷戸古墳群に継続している。

K-8 中里古墳 大中里 地点不明

古墳は昭和4年に佐野氏らによって発掘調査が実施され、その結果、形状は円墳で、金環、

鉄鍔、直刀、馬具、須恵器などの出土があった、とある（前掲報文）。しかし、本墳の文献による記載はそれにとどまり、出土遺物、地点とも不明とされる。

過去の文献より推測すれば、県道三沢～富士宮線と国鉄身延線が交差する地点、つまり富士フィルム富士宮工場南辺付近らしく、周辺の土師器を散布する石畑、牛ヶ沢、根方、大中里坂上の各遺跡、羽餅丘陵を南下して安居山の別所古墳群の存在などを踏まえれば、古墳成立に不利な条件はない。

K-9 南原古墳 大中里 地点不明

本墳は静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カード（昭和48年）が唯一の資料である。地点不詳、円墳？、須恵器出土、とされる。踏査中の口頭資料で、南原は安居山境の富士フィルム社宅付近を指すらしい。

周辺環境は前述中里古墳、別所古墳群の中間にあたり、大中里坂下、別所、上ノ原遺跡など、土師器散布遺跡を配して、古墳成立に十分な地域であるといえる。

K-10 別所1号墳 安居山字別所889 消滅

本墳は市内唯一の内容が知られた古墳であるが、学術的な成果には至らずじまいである。静岡県史第1巻、それに富士宮市史上巻（植松章八 1971）で補えば、「大宮町字別所は、市街地区の西南およそ2.2kmを隔てた丘陵地に属する部落で、大字安居山に属している。古墳のあった場所は、明治6年頃までは樹木が茂っていた原野で、その中に周円16.3mほどの小石を集めたところがあった。それは昔この地に住した浪士が、出征に際して生遭の期し難きを思い、子孫のために宅地内に石室をつくって、貴重品を埋蔵したものと伝えられていた。しかるに明治32年地目変更のため、その土地を開墾した時高さ60cmの石碑があらわれた。それには『文政十年正月二十四日建立』と題されて現存している。』以後、この古墳は明治35年に至り、遂にその子孫と称する人によって発掘された。石椁は長さ2.73m、高さ1.6m、巾91cm位の広さで、石材は、60cm角位のものを使用していたらしい。現在、畦畔に前述石碑と奥壁とされる巨石が祀られている。

この遺物は莫大なもので、刀身三口、金銅製双龍式環頸柄頭、鉄製銀象嵌の鐺、鎗をはじめ、馬具類としては雲珠四、杏葉五、轡破片を得、玉類では小玉、勾玉、切子玉があり、他に鉄鍔、金環等が出土した、という。全体としては群集墳の域をでるものではないが、金銅製柄頭や銀象嵌の鐺は一般的にも類例が少なく、本墳の被葬者のすぐれた勢力を知るものである。遺物は現在、国立東京博物館に保管されている。

さらに本墳周辺には多くの古墳をみたらしいが、富士身延鉄道（現国鉄身延線）工事の際、盛んに発掘破壊された、とのことである。

K-11 別所稲荷塚古墳（別所2号墳） 安居山字別所857-1 現存

本墳は1号墳とともに古くより知られて昭和5年編さんの静岡県史第1巻によれば、1号墳の西南73mの地点に円墳があって、頂上に稲荷の小祠が建てられてある。これも既に手をつけ

られたものらしく、刀身等を出したようである。別所区内にはこの外にも多くの古墳があったが、富士身延鉄道（現国鉄身延線）工事の行われた頃、盛んに発掘されたとのことである。と記されている。

さらに富士宮市史では、裾の一部を身延線によって破壊されるが、市内の現存古墳中最大のもので、基底径10数mを有するすぐれた古墳である。これもかつて刀身を出したと伝えられているので盗掘をうけていようが、今後の保存と調査を望みたい。として本墳の重要性を説いている。

K-12 行人塚古墳 淀師字御座松1128 消滅

本墳は戦後、前述中野、植松、野村の3氏によって発見された。規模は高さ50～60cm、径5～6m程の円墳というが、昭和40年前後の佐藤精機工場建設によって消滅された。

内容の曖昧な元村山古墳を除くと、本地域最北端の古墳である特徴をもつ。南へ1km程して琴平遺跡が存在するが、水利条件を主とした地形占地ではこれが限界に思え、こうした市街地北辺遺跡によって営まれたであろう本墳は自ずから特異であり、内容が知れずして破壊されたことは、地域の歴史上に非常に損失であったといえよう。

K-13 虚空蔵社古墳 小泉字石敷765 現存

本墳は昭和52年、本墳周辺に計画された小泉区画整理事業中、野村氏によって発見され、植松氏らと共に保存に尽くした結果、現在区画整理地内に保存される。巾10m前後、高さ2m程の頂部には虚空蔵社が祀られ、露出する石室の巨礫の間からは大木が繁茂して、一種の異様な感じを与えるが、現在では周囲を宅地にとり囲まれて過去の面影はない。北側に隣接する上石敷遺跡より奈良末～平安時代集落が発見されており、その関連は十分に指摘されよう。

K-14 誤認により欠番

K-15 舞々木1号墳 阿幸地字舞々木1047-9 現存

宅地裏に露出する大小数個の礫の積み重ねをもって古墳に理解しようとするが曖昧な状況が多い。周辺は乏水地帯で遺跡も未発達であるが、行人塚古墳や隣接の2号墳の例にしたがいが可能性をおこう。

K-16 舞々木2号墳 阿幸地字舞々木1101 消滅

本墳は舞々木1号墳の西約200mで、形状は円墳、石室が残存していたらしいが、開墾によって消滅されたらしい。口頭資料のため不確かでもあり、1号墳同様、その成立は極めて難しい状況にある、と言わざるを得ない。

K-17 寺内山の神古墳 小泉字曾比奈谷戸1767-2 現存

宅地境に石室を構成するであろう石塊が露出して、削取部分より須恵器をみたらしい。残存部分を観察すると巾6～7m、高さ1m弱の高まりが看取されるが貧弱な感もうける。本墳をとりまく寺内、小泉中村、木之行寺の古墳時代遺跡の存在、三ツ堂古墳群の南辺である位置関係を考え合せるとその存在は肯定できよう。

K-18 神祖3号墳 小泉字神祖1301-2 消滅

本墳の発見は明治時代に遡り、静岡県史第2巻によると、富士根村神祖古墳と記載され、明治40年頃発見、発掘されたらしい。どのような発掘であったか知るよしもないが、計測値等の記載もなく、遺物には土器、馬具類が記されている。

以来、本墳は消滅と理解されていたが本調査（昭和54年）直前に、当所を宅造した際直刀、馬具が出土した、ことを口頭で得た。事実なら石室下部が残存していたことになる。周辺には大室古墳、神祖1、2号墳などをみて、三ツ室古墳群を形成していたであろうが、文化財行政浸透以前に破壊されていったことは残念でならない。

K-19 藪塚古墳 沼久保字下田93 消滅

昭和54年実施の富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査によって確認された。それによれば、径8～10m、高さ1.5m程の高まりが存在しており、以後、上部は削平されたものの石室らしき石組みは残存して昭和49年に至ったが、宅造によって破壊、とある。周辺には沼久保坂上、谷外、下田等の古墳時代遺跡も密集して十分な古墳造営の可能性もあるが、本墳の他古墳群からの位置的隔絶や、野村氏採集の土師器杯が9世紀以降の所産であろう事実は追葬遺物と予想しても可能性を低くする。特異な存在であっただけにその消滅は惜しまれる。

K-20 南部谷戸古墳群 黒田字南部谷戸353 他 消滅

本古墳群は明治以後の開墾で大半が破壊されたが、それでも石室と思われる石組みは数箇所に残存していたらしく、戦後に至って前述三氏によって確認をみた。その採集品には蛇紋岩製の勾玉が2個あり、中期後葉と思われる特徴をもって市内唯一の中期古墳の存在を示唆する遺物となっている。

本古墳群が位置する南部谷戸遺跡は弥生時代後期より集落や方形周溝墓（墓地）が占められて至り、前面に位置する月の輪遺跡群のような代表的古墳時代集落の発展などを加味すれば、この地が古墳時代の有力地域であったことは間違いなく、中期古墳の誕生もあながち無理な想像ではない。しかしその後の放水路建設、宅地造成等によって破壊、消滅していったことは貴重な資料であっただけに残念である。

K-21 別所蛇塚古墳（別所3号墳） 安居山字別所882 現存

昭和54年の確認調査時の新発見古墳である。別所1号墳の南、約70～80m先に位置し、宅地境に小高いマウンドをもって頂部に祠を祀る。この塚を地元では「蛇塚」と呼んでおり、名称はそれにしがっている。遺物は確認されないが、位置的には別所古墳群の把握のなかに納まり、径6～7m、高さ2m強の形状は古墳と認めてさつかえないように思える。今後注意して監視すべきであろう。

3. 調査の概要

a. 大室古墳 昭和53年8月1日～8日

大室古墳墳丘実測調査報告(1979)によれば、基底径15m、巾2mの周濠を有する円墳である。それは緩やかに下る巾のひろい丘陵の背にあたる微高地に占地して、標高は176.5mである。墳丘の流出は激しく、数十cm～1m程の天井石が4枚露出して、山の神社への参道とされている。残存する頂部の標高は178.58mで、墳丘の高さは充分実感される。裾部は開墾によって畑地と同様に整形され、4つ、ないし5つの辺をもち、とくに西側が激しい。しかし、本墳に決定的な打撃を与えたのは東辺の宅地造成と、さらに調査終了後に実施された南東辺の宅地拡張工事である。これで東端部の周濠、及び裾部を欠く結果となりはしたが、この反省をもってこれ以上の浸略を許すことなく、市指定史跡として今後、充分な保護、監視が必要となろう。

b. 別所稲荷塚古墳 昭和61年3月4日～13日

別所稲荷塚古墳は安居山の開析谷を南面するテラス状の緩斜面の突端に占地する。ここに別所1号墳をはじめとして数基が群集していたらしいが、現在は水田に開墾されて、本墳だけがそれより迫り上がって容姿をみせる。その名残りが畦畔にはその構築礫とも思える巨石が積まれる部分があり、また前述するように北東に73mした畦畔に1号墳の奥壁が祀られている。

調査はトレンチ発掘が困難で、測量調査に頼らざるを得なかったため、詳細な観察は不能であるが、基底を標高171mラインに看取されたい。墳丘の流出は当然で、墳頂を標高173.12mにもつが依然として高さは充分である。したがって墳径を16～17mに予想されれば、静岡県史第1巻に記載される別所1号墳の「……明治6年頃までは樹木が茂っていた原野で、その中に周円16.3mほどの小石を集めたところがあった。……」にあたる。現状は数十cmの中型礫が20数個散在して露出するが、石室の構築礫には貧弱な感じを受ける。南辺は国鉄身延線敷地によって削取されるが、本墳の全体形状まで損っていない。過去に盗掘を受けたとされるが、石室の破壊は免れているらしく、最良の保存状況にあると言える。別所1号墳の優秀な副葬品を垣間見るためにも、今後の保護がとくに必要である。

c. 虚空蔵社古墳 昭和61年9月29日～10月8日

虚空蔵社古墳は沖積地に面する巾ひろい丘陵の中央部の微高地に占地する。以前は広々とした田園の中に巨木がそびえて一種の聖域をかもし出していたが、現在は宅地にとり囲まれて面影はない。標高は115m付近で、1m強を測る天井石が3～4枚露出して、その間には巨木の根が張る。他の礫の露出も目立つから墳丘の流出は激しい事が予想されて、墳頂は標高116.14mと比高はあまりない。

調査は四方にトレンチを設定して周濠を追求したが、それを確認することはなく、南西側の第1・4号トレンチ内の墳丘寄りには旧河道が検出された。古墳の積石が河道側面、底面に貼られて、暗赤灰色の河砂が多量に堆積していた。内部には近世～近代陶器片が散在して、事実、旧地形図には本河道が記されていた。したがって、両トレンチには古墳封土を確認できないが、

第2・3号トレンチにみて、とくに第2号トレンチでは石室の掘り方の上部を覆う状況が看取された。これより予想すれば、本墳は墳径8m程の小形円墳で、隣接する上石敷奈良末～平安時代集落跡の存在を考え合わせると終末期古墳である可能性は十分に肯定される。

4. ま と め

富士宮が古墳造営に不利であったことは、その分布に明らかで、造営に至る生産基盤の欠如を物語る。およそ地域の歴史は地理的環境にしたがって、時期的な生産基盤の相違をもって繁栄と沈滞が及んでくる。したがって繁栄をもって歴史が形成される訳でもなく、また沈滞の事実を挿入することなく歴史を語るならば、これはまったくの片手落ちと言わざるを得ない。富士宮の古墳の貧小、つまり沈滞は歴史的事実であり、これをないがしろにして地域の歴史を系統立てることは不可能で、充分な反省のもとに、辛うじて破壊を免れた前述3古墳の保護は我々に課せられた重要な責務である。

大室古墳や別所稲荷塚古墳はおそらく6世紀中葉以降に発生した群集墳に追随した、古墳社会の極く一般的古墳、つまり“村の首”の墳墓であろう。それは5世紀以来の農業生産力や手工業生産の飛躍的な増大と、それを根幹として発生した共同体内部の階層的分化が、地域首長層内部の階層分化も促進して、ついには広範な家父長制的家族層を生み出した結果である。この頭領が地域首長層の弱体化を招いたことは言うまでもないが、いわゆる珠流河国の後進地、生産基盤も不安な別所の地に、1号墳の莫大な遺物、とくに金銅製の双竜式環頭柄頭、鉄製銀象嵌飾、雲珠、杏葉等の馬具類、さらに装身具類はこの時期の“村の首”の隆盛を充分に裏付け、社会構造の変換の一過を如実に表わしている。

以後、7世紀中葉をむかえて「大化の薄葬令（646年）」が發布されると、古墳の造営は鈍り、規模も小型化する。さらに火葬の浸透もあって8世紀以降、ほとんど衰退していく。虚空蔵社古墳の造営はこの衰退期であろうし、それは石室周囲の礫塊や土砂を盛っただけで、小規模が故に周濠も必要としていない。このように仏教の影響、詔の發布と政治的権力の発動は、古墳造営に対して著しい抑制力となり、ついには古墳の消滅を招いていったのである。

再々であるが、珠流河の後進地における古墳の発生と消滅はそれなりの歴史的事実であり、これを後世に伝える意義は誠にとおおきく思います。末筆になりましたが、本実測調査の意義を充分御理解いただき、また御協力をいただきました地元、ならびに地主の皆様には心より感謝を申し上げます。（敬称略、順不同）

上 小泉 区・遠藤福太郎・遠藤清太郎・遠藤徳次郎・遠藤高次郎・

佐野 功・松井 保久・小川 諭・鈴木 英光

- 図-1 古墳分布図
- 図-2 大室古墳地形図
- 図-3 大室古墳墳丘実測図
- 図-4 別所稻荷塚古墳地形図
- 図-5 別所稻荷塚古墳墳丘実測図
- 図-6 虚空蔵社古墳地形図
- 図-7 虚空蔵社古墳墳丘実測図
- 図版-1 大室古墳全景
- 図版-2 別所稻荷塚古墳全景
- 図版-3 虚空蔵社古墳全景

富士横沢古墳の移築復原計画
図-6 古墳断面復原図

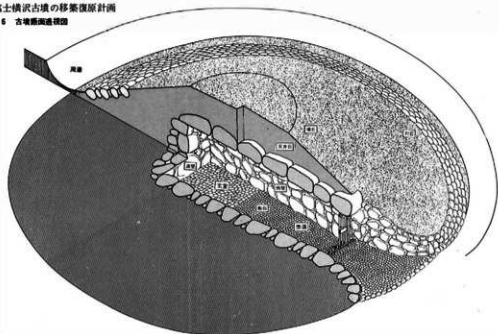


图-2 大室古墳地形图

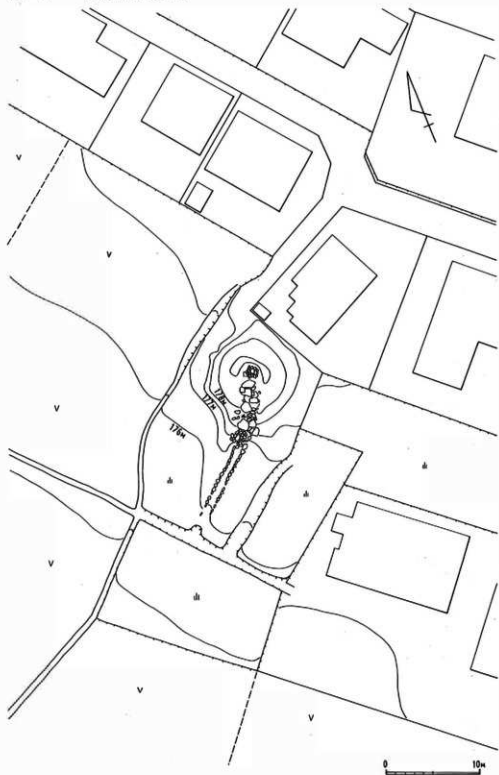




図-3 大室古墳墳丘実測図

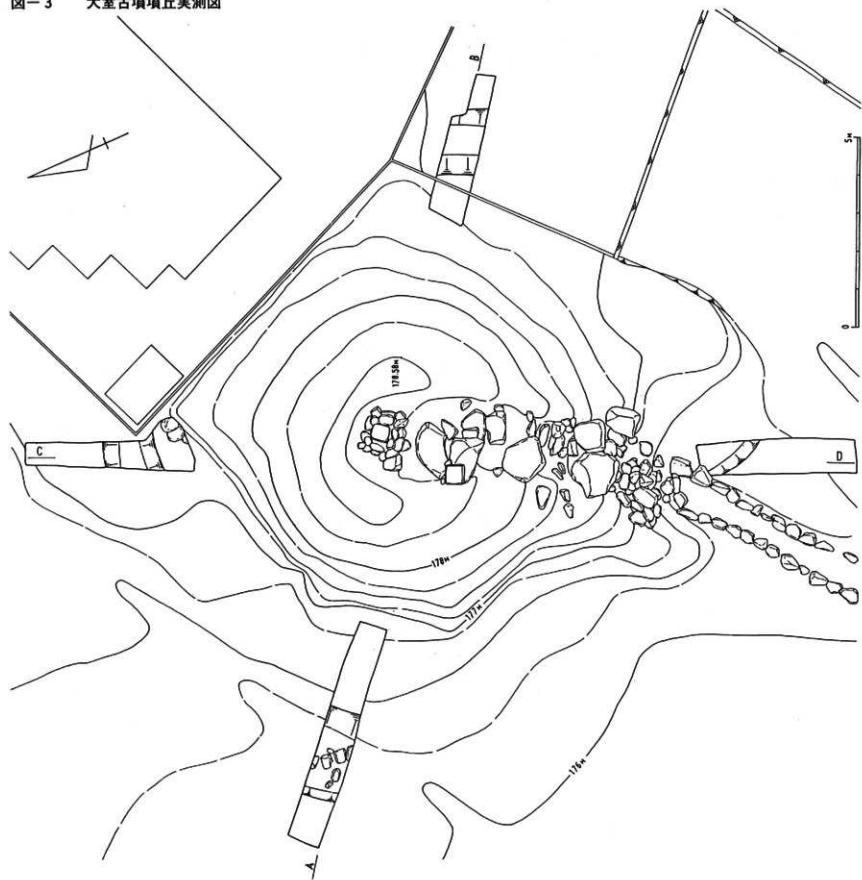


图-4 别所稻荷塚古墳地形图



JNR
MINOBU
LINE

C

L-173 M D



图-5 别所稻荷塚古墳墳丘実測図

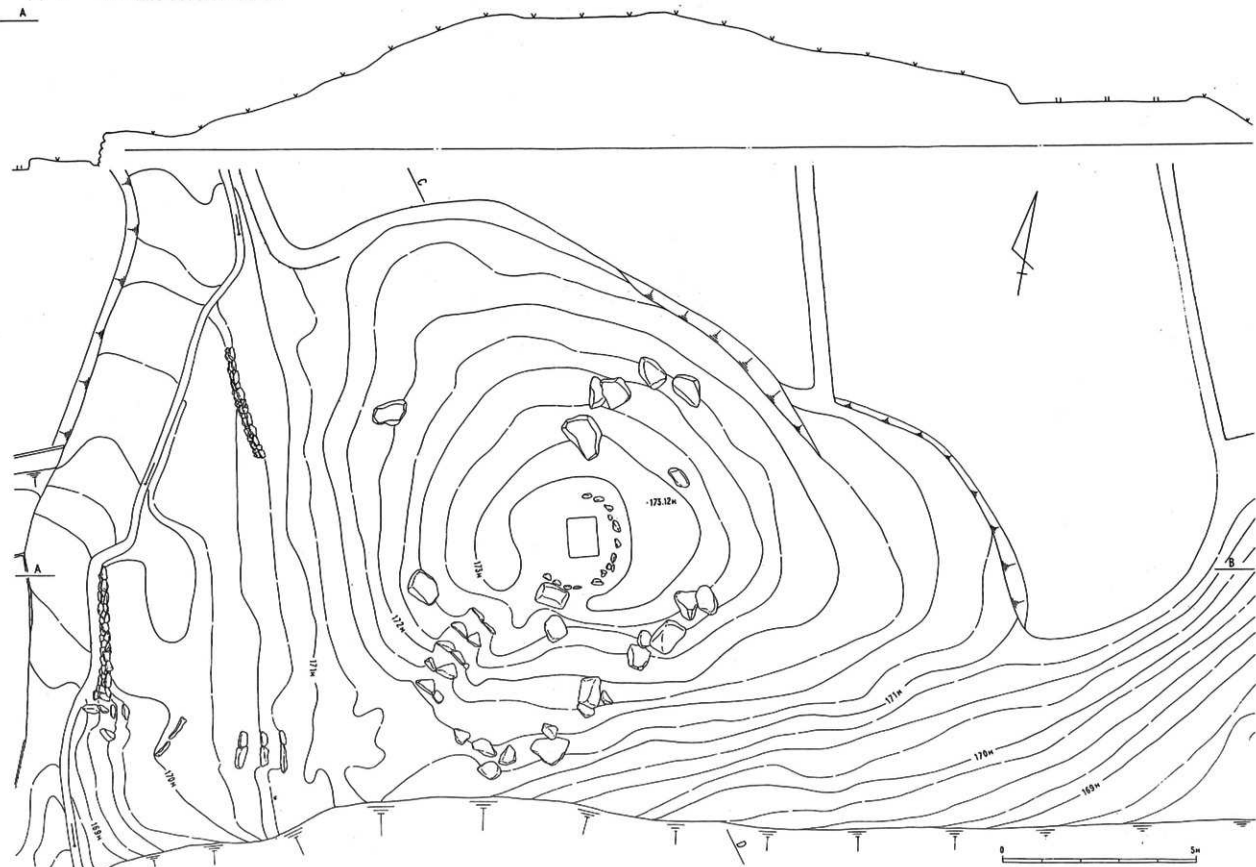
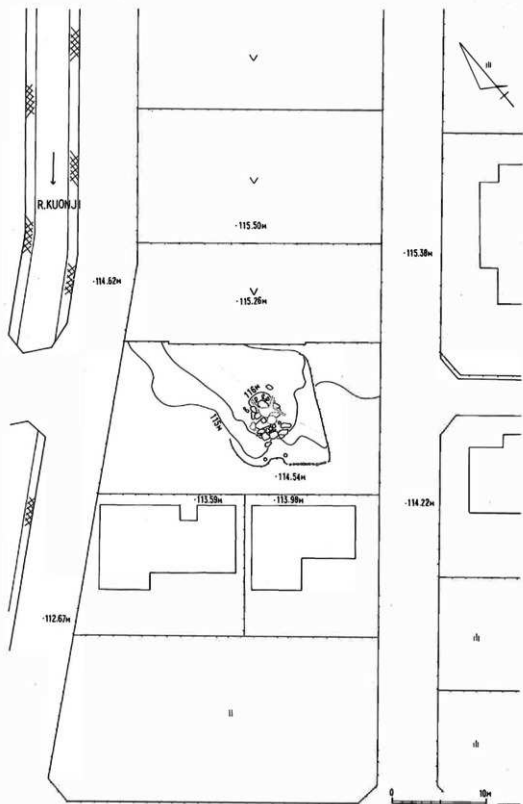
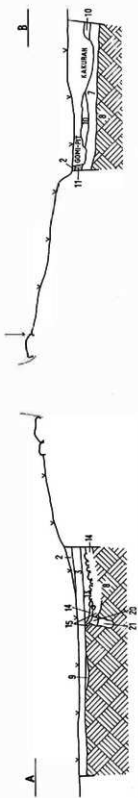


图-6 虚空藏社古墳地形図





1. 頁岩
 2. 頁岩
 3. 頁岩
 4. 頁岩
 5. 頁岩
 6. 頁岩
 7. 頁岩
 8. 頁岩
 9. 頁岩
 10. 頁岩
 11. 頁岩
 12. 頁岩
 13. 頁岩
 14. 頁岩
 15. 頁岩
 16. 頁岩
 17. 頁岩
 18. 頁岩
 19. 頁岩
 20. 頁岩
 21. 頁岩
 22. 頁岩
 23. 頁岩
 24. 頁岩
 25. 頁岩
 26. 頁岩
 27. 頁岩
 28. 頁岩
 29. 頁岩
 30. 頁岩
 31. 頁岩
 32. 頁岩
 33. 頁岩
 34. 頁岩
 35. 頁岩
 36. 頁岩
 37. 頁岩
 38. 頁岩
 39. 頁岩
 40. 頁岩
 41. 頁岩
 42. 頁岩
 43. 頁岩
 44. 頁岩
 45. 頁岩
 46. 頁岩
 47. 頁岩
 48. 頁岩
 49. 頁岩
 50. 頁岩
 51. 頁岩
 52. 頁岩
 53. 頁岩
 54. 頁岩
 55. 頁岩
 56. 頁岩
 57. 頁岩
 58. 頁岩
 59. 頁岩
 60. 頁岩
 61. 頁岩
 62. 頁岩
 63. 頁岩
 64. 頁岩
 65. 頁岩
 66. 頁岩
 67. 頁岩
 68. 頁岩
 69. 頁岩
 70. 頁岩
 71. 頁岩
 72. 頁岩
 73. 頁岩
 74. 頁岩
 75. 頁岩
 76. 頁岩
 77. 頁岩
 78. 頁岩
 79. 頁岩
 80. 頁岩
 81. 頁岩
 82. 頁岩
 83. 頁岩
 84. 頁岩
 85. 頁岩
 86. 頁岩
 87. 頁岩
 88. 頁岩
 89. 頁岩
 90. 頁岩
 91. 頁岩
 92. 頁岩
 93. 頁岩
 94. 頁岩
 95. 頁岩
 96. 頁岩
 97. 頁岩
 98. 頁岩
 99. 頁岩
 100. 頁岩

L: 1:116-20M

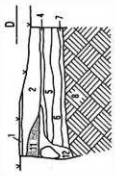
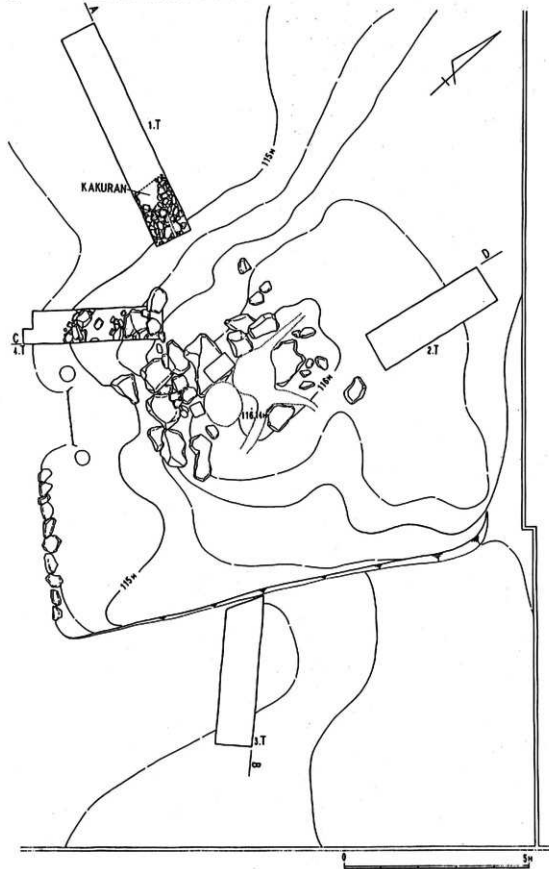


図-7 虚空蔵社古墳墳丘実測図



図版一 大室古墳全景



図版一 2 別所稲荷塚古墳全景



図版-3 虚空蔵社古墳全景



富士宮市文化財調査報告書第10集

富士宮市古墳実測調査報告書

昭和62年3月31日

編 集 富士宮市教育委員会
発 行 富士宮市教育委員会
〒418 静岡県富士宮市元城町1-1
(0544) 27-3111 (代)

印 刷 備 緑 星 社
静岡県富士宮市矢立町705
T E L (0544) 23-2882